地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

写真集『GREAT HASHIMA～大いなる端島』を出版
「廃墟」ではなく創業期こそおもしろい

文／忘羊社代表・藤村興晴

去る七月八日、九州・山口を中心とする幕末～明治期の産業施設がユネスコ・世界文化遺産に正式登録された。

今回登録されたのはまだ稼働中の施設を含む計二十三件で、うち十六件が九州に集中しているが、なかでも長崎市の沖合に浮かぶ炭鉱の島・軍艦島は、今後最も注目を浴びる施設になるだろう。

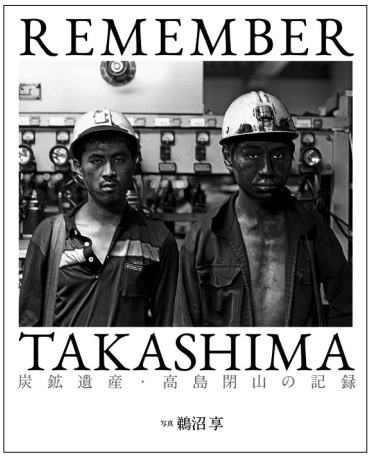
わが社では昨夏、閉山四十周年を迎えたこの島の操業当時の古写真を集めた写真集『GREAT HASHIMA～大いなる端島』を出版。すでに昨年から世界遺産候補となっているなかでの刊行だったので、駆け出しのわが社としては正直、期するところがあった。だから、今回の登録決定のニュースに接したときは、やはりホッとしたというのが本音だ。なぜって、まだそれなりに在庫を抱えているわけだし、軍艦島の「本家」であった隣の島・高島炭鉱の写真集だって刊行目前なのだ！

だが周知の通り、この軍艦島や高島を含む一部の施設をめぐっては戦時中の徴用問題がわだかまっており、のんきに喜んでいられないのも事実。今回のすったもんだも、結局政治決着なのであって、このままではどうにもスッキリしない。

スッキリしない理由は他にもある。

まず軍艦島には操業当時の建物が廃墟となって残されており、その一見おどろおどろしい外観ゆえか、近年多くの見学客で賑わってきたものの、一部の建物は老朽化が目立ち、いつ崩落してもおかしくない状態。だが保存には莫大な費用がかかる。そして何より、いわゆる「廃墟ブーム」というものに、

『GREAT HASHIMA ～大いなる端島』（忘羊社刊・本体価格２５００円）



『REMEMBER TAKASHIMA ～炭鉱遺産・高島閉山の記録』（忘羊社刊・本体価格２７００円）

はじめからピンとこないのだ。

よくご存じでない方のために、軍艦島について簡単に説明しておこう。長崎港から約二十キロの沖合に浮かぶ小島で、正式名称は「端島（はしま）」。今でも地元長崎市民や外国の観光客にはむしろ「端島」のほうが通りが良い。早くも江戸時代後期には露出した石炭層が発見され、明治になって採掘が本格化。約百年にわたって良質の石炭を産出し続けた。全島が採掘のための設備と関係者の住宅などで構成され、高層アパートがひしめきあう外観から、「軍艦」の名が冠されるようになった。

廃墟となったのは一九七四年の閉山後。無人島となり、三十年以上雨風にさらされ続けた。立ち入り制限が解除され観光地化されたのはほんの五、六年前のこと。アパート内部にはテレビや冷蔵庫、洗濯機といった昭和の利器が当時のまま取り残されており、「タイムカプセルだ！」「バトルシップ・アイランドだ！」などとはやし立てられた結果、一気に有名になった。

もちろん興味は人それぞれでかまわないのだが、この島のすごさはそんなところにあるのではない。この島に関する限り、やはり操業期（特に草創期）がおもしろいのだ。

まとめる最後のチャンス

そこで写真集の編集にあたっては、廃墟以降のものは採用せず、特に明治期から戦前の写真など、歴史的に価値の高いものを優先的に選んだ。次に、過酷な採炭現場の写真はもちろん、東京の十倍以上の人口密度を誇ったという島内の生活、そして猛烈な高潮が島を襲う光景など、人びとの営みにスポットをあてて構成した。何よりこの島にかつて人が暮らしていた事実をもう一度実感してほしかったし、島出身の方々が高齢となったいま、こうしたアーカイブをまとめる最後のチャンスと思ったのだ。

ただ、案の定というべきか、全国紙の書評をはじめ出足は好調だったものの、軍艦島の「ぐ」の字も出てこない書名が災いしたのか低調をキープ（？）。事情を知る同業者からも揶揄される始末で、トホホである。

だがこれに懲りず、実はもう二冊、関連書の出版を計画している。一冊は先ほども述べた軍艦島の「本家」こと、お隣の高島炭鉱の写真集。こちらはすでに下版済みで、間もなく刊行予定。

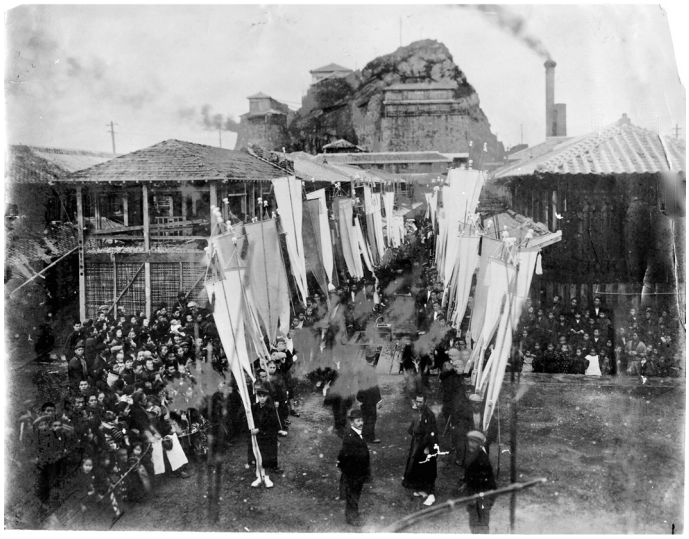
もう一冊がミソで、軍艦島草創期の建築・土木にたずさわった技師たちについての物語だ。とりわけ明治初期、グラバーや後藤象二郎らの挫折後、経営に乗り出した岩崎弥太郎の三菱が集めた当時のエリート技師たちによってこの島がつくられていったのだが、彼らの功績は、地元長崎市民はおろか建築史や土木史の専門家の間ですら、ほぼ忘れ去られているのだ（ちなみにわが国の活版印刷の父といわれる本木昌造も、もとは三菱長崎造船所の技師だ）。

辰野金吾や伊東忠太といった建築家の名は残っているのに、なぜ土木家や鉱山師の名は残らないのだろう？　そして、なぜ絶海の孤島に国内初の鉄筋コンクリートマンションを建てることができたのだろう？

逆にいえば、ここに近代（建築）史が掘り下げてこなかった重要な「鉱脈」が隠されているように思う。

彼らの物語はすなわち、近代産業の礎が築かれた時代の「現場」のドキュメントだ。むしろ世間の耳目が集まるようになった今こそ、こうした地味なテーマの本を読者に届ける最良のチャンスだと思っている。

《ふじむらおきはる・忘羊社（ぼうようしゃ）代表》



『GREAT　HASHIMA　～大いなる端島』から、大正初期の端島。すでに多くの島民が暮らしていたことがわかる。

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

『のさらん福は願い申さん』●飯田辰彦著

柳田國男が出版した、岩手県遠野の昔話を集めた『遠野物語』と、本書の主題『後狩詞記』(のちのかりことばのき、1909年）は、わが国民俗学の出発点になったという。宮崎県椎葉村は九州山地最奥にあり、焼畑農業をはじめ数々の伝統的な風習が残る民俗の宝庫と言われ、「ひえつき節」の里でもある。『後狩詞記』は、この椎葉村での猪猟など、狩り言葉や狩りの作法、決まりについて当時の村長に書いてもらい、柳田が編集し注を付す。著者の飯田は度々椎葉村に滞在して狩りに同行し、『後狩詞記』の狩りの内容が100年以上経た現在ではどう変化したかを詳細に比較検証していく。その結果は、今も当時と変わらず、椎葉の狩りは趣味のハンティングでもなければ収入手段としての生業でもない。狩りは共同体のすべてが参加する厳かな神事、祭事である。だからこそ狩りは心底から湧き上がる楽しみ、深い愉悦を伴うという。山の神からの授かりものだけを少し狩るという意味のタイトルに、その本質が凝縮されている。

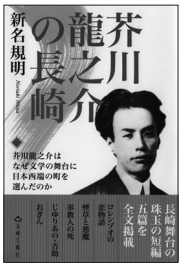
◆2484円・四六判・337頁・**鉱脈社**・宮崎・2015/6刊・ISBN978-4-86061-585-7

『汽車ポッポ判事の鉄道と戦争』●ゆたかはじめ著

鉄道に魅入られた人を鉄道マニアといいます。東京高裁判事まで勤め上げつつ日本中の鉄道に乗りつくした著者も筋金入りの鉄道マニアといえるでしょう。昭和3年生まれの著者が生きてきた時代は、対外膨張から敗戦を経て戦後復興へと続いていく激動の時代でした。幼少期に乗っていた東京市電(後の都電)は今やすっかり姿を消し、寝台列車もいまや風前の灯です。また戦時中から戦後の混乱期の記憶はとりわけ暗い色に包まれています。軍事地帯ではブラインドを下ろすことを強制され、機銃掃射で九死に一生を得、家族の住む被爆地長崎へ向かうときには客車でなく貨車に乗ることを余儀なくされます。そして今、著者は沖縄に路面電車を走らせるという夢を追っています。そんなマニア人生から浮かび上がってくるのは鉄道の記憶が乗務員や乗客等々多くの人の手によって織り成されていること。だからこそ公共交通を「生活文化」と呼びその可能性を探る著者の言葉が重く響きます。

◆1944円・四六判・209頁・**弦書房**・福岡・2015/5刊・ISBN978-4-86329-117-1

『芥川龍之介の長崎』●新名規明著



没後88年を迎える芥川龍之介。彼は二十歳の頃、長崎を舞台にした「ロレンゾオの恋物語」（本書収録）という短編を書いているが、この時、芥川はまだ長崎へ行ったことはなかった。彼が長崎を訪れたのは大正8年の5月と大正11年の5月。旅行好きの芥川は京都と長崎をわけても好きな場所と挙げているが、この二ヶ所が芥川作品の出典とした「今昔物語」や「南蛮キリシタン文献」の舞台だったからだと推測できる。

長崎来訪時は地元の素封家永見徳太郎邸に宿泊。最も愛した弟子と言われ、のちに郷土史家として大成する渡辺庫輔や蒲原春夫とも出会う。また芥川が描いた「河童屏風」を贈られたことで有名な芸妓照菊（杉本ワカ）の存在も大きい。戦後の社会を生き抜いたこの長崎人4人にもスポットを当て、芥川と長崎の関係を際立たせていく。最初の切支丹物と言われる「煙草と悪魔」など長崎を舞台とした作品5編も収録し、それぞれの解説付き。

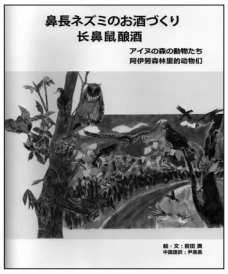
◆1296円・四六判・260頁・**長崎文献社**・長崎・2015/5刊・ISBN978-4-88851-237-4

『辺野古　豊里友行写真集（増訂版）』●豊里友行著

洞窟（ガマ）に水没、あるいは原野に野ざらしにされたままの遺骨を60年近く収集し続け、私設の戦争博物館を設立した島民。オスプレイ配備反対の座り込み住民の肖像を撮影する警察官。抗議住民のカヌーをハブ取りの棒状のもので確保する海上保安庁職員。平和行進を終え誰もいなくなった浜で竜神様に祈りをささげるオバー。1999年から辺野古の日常を撮り続ける豊里友行は、「沖縄県人としての血が呼んでいるような感覚や感情を紐解くように私は、沖縄を撮らされて行くし、魅せられている。私は、沖縄に生きていて、お互いの人生に交わる時間軸において、沖縄のアンマー（母）やオジーオバーなどの表情、ウチナーグチ（沖縄の言葉使い）、無造作な所作にいたるまで写真に切り取るべき瞬間にウムイ（想い）を馳せていく。」と語る。縦13×横19cm、155頁の小さな写真集が、掌の中でずっしりと重い。この重さこそが、剥き出しにされた沖縄の現実なのだと思う。

◆1080円・四六判・154頁・**榕樹書林**・沖縄・2015/5刊・ISBN978-4-89805-181-8

『鼻長ネズミのお酒づくり』●前田　満著

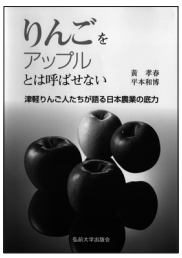


人間の手のひらに隠れてしまうほど小さな鼻長ネズミが住んでいる森の動物たちは余り仲が良くなかったが、みんなに仲良くしてほしい鼻長ネズミはごちそうを作ってみんなをもてなすことを思いつく。海辺でコメとコウジを見つけ、お酒を作ろうと考えた鼻長ネズミは両方の鼻の穴に二つの材料を詰め、必死で海辺と家を往復。やっとお酒が出来上がり、ワシとカラスを招待したのに、二羽はケンカを始めてしまう。果たして鼻長ネズミの願いは叶うのだろうか。

哺乳類学者の著者が野生動物研究で北海道各地を歩いた時に耳にした数々のアイヌの昔話。本書はその中から表題作を含め5話を紹介した絵本。小さいながらもクマ退治に出かけるミソサザイ。互いの足を羨ましがり、とりかえっこしたエゾシカとユキウサギなど、動物たちの行動が微笑ましい。アイヌの知恵の神様と言われるフクロウが勇敢な動物たちを励ますのも印象的。中国語訳付き。

◆1080円・250×210mm・36頁・**澪標**・大阪・2015/5刊・ISBN978-4-86078-299-3

『りんごをアップルとは呼ばせない　－津軽りんご人たちが語る日本農業の底力』●黄　孝春／平本和博著

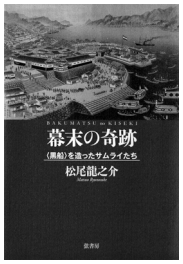


青森りんごは全国生産量の半分を占め、輸出力の向上で、ブランドイメージを世界に浸透させ、農業の活性化を促した優等生と称される。中心地は津軽平野。中でも三方を山に囲われた狭い傾斜地と台地に集中する。この地にりんごがもたらされたのは明治初期、旧士族の土地活用政策によるものであった。しかしそこは、必ずしもりんご生産の最適地ではなかった。

なぜなら、生育期に梅雨が重なる高温多湿で病害虫多発の条件をもち、冬は豪雪による落果や倒木・枝折れの発生、しかも大消費地に遠い。だからこその品種改良、希少価値のある品種づくり、農園経営、生産者組合の結成、直接販売など流通構造の変革、価格の適正評価、ブランド化などあくなき挑戦とイノベーションがあった。品種開発、栽培、流通、輸出、加工の立場から、またサポート部門としての農機具・肥料・農薬業者、研究者たちが、自分の考えと信念、これからを語る。その矜持が書名に込められている。

◆1296円・A5判・244頁・**弘前大学出版会**・青森・2015/5刊・ISBN978-4-907192-31-0

『幕末の奇跡　ー〈黒船〉を造ったサムライたち』●松尾龍之介著



日本がなぜ、産業革命を経験せず短期間で近代国家の仲間入りをすることができたのか。その理由の一つに、19世紀の西洋文明で普及した蒸気船との邂逅があった。つまり、黒船来航をきっかけに日本は、洋式海軍の創立と軍艦建造に着手する。それは日本が欧米世界の「19世紀グローバル化」の波に呑み込まれることを意味した。明治維新はこのときから始まる。面白いのは、蒸気機関の普及が、ヨーロッパと違って日本は海から始まったことである。その原点ともいえるのが、幕府の長崎海軍伝習所の開設であった（1955年）。伝習生は、オランダ教師団から砲術・造船・航海術のほか高度な科学技術や医学を学んだ。参加者は幕臣のみならず諸藩の藩士も多数いた。伝習所はわずか3年半で閉鎖されたが、習得した知識や技術は日本各地へと広まっていき、明治期の基幹産業へと継承されていく。本書は伝習所関係者14人の経歴やエピソードを中心とした蒸気船からみた幕末史である。

◆2376円・四六判・297頁・**弦書房**・福岡・2015/5刊・ISBN978-4-86329-119-5

地方小出版流通センター　ジャンル別新刊案内

2015年6月1日～30日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は税込（消費税率8%）表示です。

【雑誌】

◆**faura**　48　大橋　弘一編　A4　80頁　1028円　ナチュラリー［北海道］978-4-503-20563-6　15/06

◆**あおもり草子**　No.230　佐藤　史隆編　A4　48頁　600円　企画集団ぷりずむ［青森］978-4-503-20555-1　15/06

◆**榛名団**　15号　富沢　智編　A5　88頁　648円　榛名まほろば出版［群馬］978-4-503-20579-7　15/06

◆**GREEN REPORT**　426　廣瀬　仁編　A4　192頁　2800円　地域環境ネット［埼玉］978-4-905457-58-9　15/06

◆**ママともぷらす　東京ベイ・千葉版**　No.65　赤星　恵美編　A4　88頁　600円　明光企画［千葉］978-4-503-20570-4　15/06

◆**子どもと読書**　412号　親子読書地域文庫全国連絡会編　A5　40頁　550円　親子読書地域文庫全国連絡会［神奈川］978-4-907376-12-3　15/06

◆**かまくら春秋**　No.541　伊藤　玄二郎編　B6　92頁　320円　かまくら春秋社［神奈川］978-4-7740-0655-0　15/05

◆**くらしと教育をつなぐ　We**　No.196　中村　泰子編　稲邑　恭子編　A5　80頁　864円　フェミックス［神奈川］978-4-903579-64-1　15/06

◆**AXIS**　Vol.176　石橋　勝利編　A4　128頁　1800円　アクシス［東京］978-4-503-20578-0　15/08

◆**オルタ**　464　田中　滋編　B5　17頁　324円　アジア太平洋資料センター［東京］978-4-503-20580-3　15/06

◆**口承文芸研究**　第38号　日本口承文芸学会編　A5　238頁　2376円　岩田書院［東京］978-4-503-20571-1　15/03

◆**地方史研究**　第375号　地方史研究協議会編　A5　139頁　1234円　岩田書院［東京］978-4-87294-975-9　15/06

◆**日本宗教文化史研究**　第37号　日本宗教文化史学会編　A5　120頁　2376円　岩田書院［東京］978-4-503-20582-7　15/05

◆**比較都市史研究**　第34巻　第1号　鵜川　馨編　B5　52頁　3240円　岩田書院［東京］978-4-503-20572-8　15/06

◆**洋学史学会研究年報**　洋学22（2014）『洋学』編集委員会編　A5　221頁　4320円　岩田書院［東京］978-4-946540-22-6　15/05

◆**仏事**　No.178　奥村　昇編　A4　124頁　1620円　鎌倉新書［東京］978-4-503-20581-0　15/07

◆**月刊住職**　No.199　矢澤　澄道編　A5　199頁　1404円　興山舎［東京］978-4-908027-08-6　15/06

◆**子どもの文化**　No.530　片岡　輝編　A5　47頁　313円　子どもの文化研究所［東京］978-4-503-20546-9　15/06

◆**the座**　No.83　小西　恵美子編　B5　48頁　1000円　こまつ座［東京］978-4-503-20573-5　15/05

◆**the座**　No.84　小西　恵美子編　B5　32頁　901円　こまつ座［東京］978-4-503-20574-2　15/05

◆**茶道の研究**　No.715　三徳庵編　A5　78頁　540円　三徳庵［東京］978-4-503-20547-6　15/06

◆**Sports−Car Racing**　Vol.21　鈴木　英紀編　A

売行良好書

期間：2015年6月16日～7月15日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『あたしとあなた』2160円・ナナロク社　(2)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1404円・書籍情報社　(3)『不登校は1日3分の働きかけで99%解決する』864円・リーブル出版　(4)『老いと幼なの言うことには』1620円・小澤昔ばなし研究所　(5)『今、この本を子どもの手に』1080円・東京子ども図書館　(6)『熊野古道伊勢路を歩く』2160円・サンライズ出版　(7)『書生の処世』1620円・本の雑誌社　(8)『明星』3240円・ナナロク社　(9)『中国の反外国主義とナショナリズム』3888円・中国書店　(10)『徴兵体験　百人百話』1620円・17出版　(11)『汽車ポッポ判事の鉄道と戦争』1944円・弦書房　(12)『美少年論』5184円・佐賀新聞社

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『東京かわら版　7月号』432円・東京かわら版　(2)『昭和プロレスマガジン　36』1000円・昭和プロレス研究室　(3)『あたしとあなた』2160円・ナナロク社　(4)『本の雑誌　386号』840円・本の雑誌社　(5)『古写真で読み解く福岡城』1944円・海鳥社　(6)『古本屋ツアー・イン・神保町』2160円・本の雑誌社　(7)『書生の処世』1620円・本の雑誌社　(8)『本で床は抜けるのか』1728円・本の雑誌社　(9)『激辛数独17』756円・ニコリ　(10)『松江城』540円・ハーベスト出版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『東京の川を歩く』3024円・さきたま出版会　(2)『不登校は1日3分の働きかけで99%解決する』864円・リーブル出版　(3)『日本サブカルチャーを読む』3024円・北海道大学出版会　(4)『氷川丸ものがたり』1512円・かまくら春秋社　(5)『改訂　ジュニア版　琉球・沖縄史』1620円・編集工房東洋企画　(6)『琉球武術「首里手」の構造解明』1620円・琉球新報社　(7)『フィールドワーク心得帖　新版』1080円・サンライズ出版　(8)『戦国大名』2200円・忘羊社　(9)『奥多摩登山詳細図（西編）　雲取山・三頭山・御前山・鷹ノ巣山　全112コース』950円・吉備人出版　(10)『高尾山・景信山　陣馬山　登山詳細図』823円・吉備人出版　(11)『少年日本史』3240円・皇學館大學出版部　(12)『棟方志功の原風景』3456円・津軽書房

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼昨年10月～11月に倉吉市立図書館で開かれた「ブックインとっとり2014」に出品展示された地方出版物の中から、第28回地方出版文化功労賞が選考され、先日発表されました。今回は本賞の該当者はなしとなりましたが、奨励賞や特別賞を以下の作品が受賞しています。／奨励賞：【古文書にみる会津藩の食文化】平井美穂子著・歴史春秋社刊。選考理由…ハレの日ばかりではなくケの日の食事（下級藩士や藩校での日々の食事など）も再現されている。地域の文化を掘り起こし皆と共有する…これぞ地方出版と言える。／奨励賞：【基地で働く－軍作業員の戦後】沖縄タイムス中部支社編・沖縄タイムス社刊。選考理由…基地反対闘争などに比べ、基地に直接関係した方々に関する類書は少ない。また様々な職種の方の証言があり、基地のシステムや側面が理解できる。そして現地にいなければ知り得ないことや職場の雰囲気も口述されている。／特別賞：【日露現場史　北方領土－終わらない戦後】本田良一著北海道新聞社刊。選考理由…ロシア関係に関心を持つ複数の審査員から深堀りされた内容に高い評価があった。北方領土の今を理解し、将来を考えるために役立つ資料。

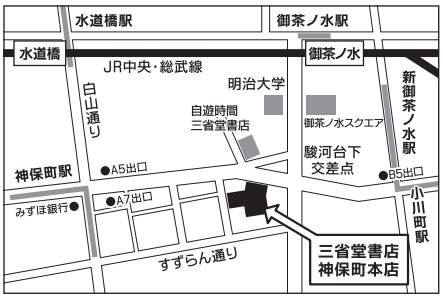
郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店　営業のごあんない

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。